

## 幕屋(栄光と美を表す聖なる装束Ⅱ)

前回は、装束の中で、エポデを見た。続きを見ていく。

### さばきの胸当て

「あなたはさばきの胸当てを、巧みな細工で作る。それをエポデの細工と同じように作らなければならない。すなわち、金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布で作らなければならない。それは、四角形で、二重にし、長さは一あたり、幅は一あたりとしなければならない。その中に、宝石をはめ込み、宝石を四列にする。すなわち、第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。第二列はトルコ玉、サファイヤ、ダイヤモンド。第三列はヒヤシンス石、赤めのう、紫水晶、第四列は緑柱石、しまめのう、碧玉。これらを金のわくにはめ込まなければならない。この宝石はイスラエルの子らの名によるもので、彼らの名にしたがい十二個でなければならない。十二部族のために、その印の彫り物が一つの名につき一つずつ、なければならない。また編んで燃った純金の鎖を胸当てにつける。胸当てに、金の環二個をつけ、その二個の環を胸当ての両端につける。この二筋の金のひもを胸当ての両端の二個の環につける。その二筋のひもの他の端を、先の二つのわくにつけ、エポデの肩当てに外側に向くようにつけなければならない。ほかに二個の金の環を作り、これを胸当ての両端、すなわち、エポデの前に来る胸当ての内側の縁につける。ほかに二個の金の環を作り、これをエポデの二つの肩当ての下端の外側に、すなわち、エポデのあや織りの帯の上部の継ぎ目に接した面の上につける。胸当ては、青ひもで、その環のところをエポデの環に結びつけ、エポデのあや織りの帯の上にあるようにする。胸当てがエポデからずり落ちないようにしなければならない。アロンが聖所にはいるときには、さばきの胸当てにあるイスラエルの子らの名をその胸の上に載せ、絶えず主の前で記念としなければならない。さばきの胸当てには、ウリムとトンミムを入れ、アロンが主の前に出るときに、それがアロンの胸の上にあるようにする。アロンは絶えず主の前に、イスラエルの子らのさばきを、その胸の上に載せる。」(出エジプト 28:15-30, 39:8-21)

さばきの胸当ては、ご自分の民に対する主の愛を示している。ここでいうさばきは、罪の宣告ではなく、判断、指導を意味する。材料は、エポデと同じ金色を含む「金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布」である。これはこれまでも述べてきたように、イエスの性質を表す。

長方形の亜麻布を2つ折に縫い合わせ、二重にし、一辺が一あたり(親指と小指を広げた間の長さで約半キュビト、22.2cm)の正方形になるようにする。内側は袋になり、ウリムとトンミムを納める。表面は、金の編細工を施し、わくをつけ、十二区分に区切って、それぞれ十二部族を象徴する十二の宝石を取り付ける。宝石には、十二部族の名を1つずつ刻む。この十二個の宝石は、それぞれ、どの部族に当たるかは、いろいろ意見があるが、聖書には明確に書かれていない。

ある本の解釈を参考にしたものをのせておく。

民数記2章で、各部族の宿営は、幕屋の東、南、西、北の4つに分けられたことによる分類。

第一列: 東

赤めのう: 赤くばら色になる、顔に血色がある、健康で血色がある。新エルサレムの城壁の第6の土台石(黙示録 21:20)。

ユダ: 主をほめたたえる、賛美、感謝(創世記 29:35欄外)。

トパーズ: 牧場、楽しい場所、満足、宿る場所。新エルサレムの城壁の第9の土台石、黄玉(黙示録 21:20)。

イッサカル: 報酬をもたらす(創世記 30:18欄外)。

エメラルド: 今日どのどの宝石に当たるかは不明な点が多い。欽定訳ではざくろ石(燃える、稲光のようにひらめく)。

ゼブルン: ともに住む(創世記 30:20欄外)。

第二列: 南

トルコ石: 今日どのどの宝石に当たるかは不明な点が多い。欽定訳ではエメラルド(赤、もしくは緑の光を放つ輝く石)。

ルベン: 子を見よ(創世記 29:32欄外)。

サファイヤ: 階段(上ること)、隠された霊的真理の象徴。新エルサレムの城壁の第2の土台石(黙示録 21:19)。

シメオン: 聞く(創世記 29:33欄外)。

ダイヤモンド: 堅い石。切り、切断し、彫る石。

ガド: 幸運(創世記 30:11欄外)。

第三列: 西

ヒヤシンス石: 欽定訳では黄水晶(黄色の穀粒のような黄金の黄色)。新エルサレムの城壁の第11の土台石、青玉(黙示録 21:20)。

エフライム: 実り豊かなこと(創世記 41:52欄外)。

めのう: 流れや閃光に分かれること、著しい火、真紅色の火。

マナセ: 忘れる(創世記 41:51欄外)。

紫水晶(アメジスト): 紫は高貴のしるし。所有者。新エルサレムの城壁の第12の土台石(黙示録 21:20)。

ベニヤミン: 右手の子(創世記 35:18欄外)。

第4列: 北

緑柱石: 試す、試みる、調査するの意。新エルサレムの城壁の第8の土台石(黙示録 21:20)。

ダン: 正しくさばく(創世記 30:6欄外)。

しまめのう: 漂白する、色をとって光沢を出す語源。

アシェル: しあわせと思うが語源(創世記 30:13欄外)。祝福された、幸福な。

碧玉: 磨く、打ち勝つ力、勢力が語源。新エルサレムの城壁の第1の土台石(黙示録 21:19)。

ナフタリ: わが戦い(創世記 30:8欄外)。

この割り当てが、正しいかどうかはわからないが、いずれにしても、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ 43:4)と言われる神は、私たちひとりひとりをひとまとめにではなく、違う宝石のように守り、支えてくださるのである。私たちは、これらの宝石が象徴するように、個性をもったまま、それぞれの特

3 エメラルド	2 トパーズ	1 赤めのう
6 ダイヤモンド	5 サファイヤ	4 トルコ石
9 紫水晶	8 めのう	7 ヒヤシンス石
12 碧玉	11 しまめのう	10 緑柱石

徴にしたがって、キリストを表しながら、光り輝き、一致していけばよいのである。

### エポデへの取り付け

エポデの肩当て同様、二つの純金の鎖を編んで作った撚ったひもを二個の金の環を使って、胸当ての両端につける。ひもの他の端は、エポデの肩当ての二つの金のわくに胸当てが外側に向くように、つまり、宝石が外に向かって輝くように取りつけた。エポデの肩当てで書いたように、二つの純金の鎖、二つの金の環、つまり二つの義とは、人に対する義、神に対する義ということであった。

更に、内側にも二個の金の環が、胸当て側とエポデ側につけられ、環と環はで結び付けられ、帯の上から落ちないようにしっかりと付けられた。やはり、エポデの肩当てで書いたように、帯は奉仕の象徴であった。十二の石はこうして、青ひも（天の色青、結ぶひも、つまり、天からの賜物）で帯（奉仕）に結びつけられる。しっかりとした支えとともに。

こうして、十二の名を刻み付けられた石は、胸の上（愛）に載せられ、絶えず主の前に覚えられる。

### ウリムとトンミム

ウリム(七十人訳では「表明」)は聖霊の神聖な光を表す。トンミム(七十人訳では「真理」)は生きたみことばの完全さを表す。この2つは、知恵を示す。イエス・キリストの象徴である。イエスは、高いところからではなく、民と一体となられ、民をさばかれる。御旨を伺うさばきは、大祭司の胸当てにウリムとトンミムを入れる方法でなされていた。大祭司が垂れ幕の前に立つと、ウリムとトンミムの光と完全さが胸当てのその宝石を光らせ、それによって、神のみこころと思いが大祭司に示されたようであるが、詳しくはわからない。